群教セ	G 10－01
	平 15.213 集

働くことの大切さを知り、進んで働こうとする心情を育てる道徳指導の工夫

── 社会科や学活、総合的な学習の時間の体験活動と関連させて ──

特別研修員　　大河内　淳一

≪研究の概要≫

本研究は、道徳の時間と社会科や学級活動、総合的な学習の時間の体験活動を関連させて、地域人材の活用を通して、働くことの大切さを知り、進んで働こうとする心情を育てる道徳指導の工夫について、実践的に研究したものである。具体的には、道徳１「ぼくたちの渡良瀬川」、道徳２「気持ちのよい汗」、道徳３「点字メニューに挑戦」を基に、社会科の上下水道の学習や総合的な学習の時間の「点字体験」の学習を関連させる道徳指導の工夫を行った。

【キーワード：道徳　小学校　みんなのために働く　体験活動　ゲストティーチャー（ＧＴ）】

Ⅰ　主題設定の理由

働くことは、単に自分が生活していくためだけでなく、自分に課せられた社会的責任を果たすことである。そのことを通して、社会に対する奉仕や公共の役に立つ喜びをも味わうことができる。中学年では、働くことの楽しさや喜びの体験を積むことによって、力を合わせて仕事をすることの大切さやよさを理解し進んで働こうとする態度を育てることが大切である。決められた仕事をこなすことができれば、学習に対してまじめに取り組むことができ、今後、厳しい社会を生き抜いていく上で役立つと考える。

本学級（小学校４年　男子 10 名　女子 17 名　計 27 名）の児童は、比較的に男女の仲はよく、校庭で一緒にボール運動をしたり、給食でも仲良く食事をしたりしている。学級のボールの使用割り当てや転校する友達のお別れ会の運営など自主的に話し合い、みんなで協力し守ることができる。しかし、宿題を忘れる児童が多く、指導しても繰り返し忘れる場面も見られる。係や当番でも学級全体でみると十分に機能しているとは言えず、指示されないと動けなかったり、何日かすると忘れたりすることもある。目先の楽しい友達や遊びのことを優先し、仕事に積極的になれない児童が多いように感じる。家庭訪問の調査では、決まったお手伝いをしている児童は僅かで、多くは気が向いたら自分の興味あるものに対しては手伝いをする程度で、全くしない児童も何名かいた。このように、お手伝いや宿題など、達成感や成就感を味わう経験が不足しているために、自分から進んでやらなければという使命感や責任感も育たないのではないかと考える。

そこで、仕事をすることの意義を学び、自分の役割をやり遂げた成就感を味わう経験や機会を多くもつために、道徳の時間と社会科や学級活動、総合的な学習の時間などの体験活動とを関連させて、働くことの大切さを知り、進んで働こうとする心情を育てていきたいと考えた。

まず、働く経験を積ませるために、家庭の理解と協力のもと夏休みに「お手伝い大作戦」を行った。２学期の初めに成果と課題を話し合い、続けていくことを確認した。学校生活でも仕事への取組を充実させるために、係や当番の実施状況が一目でわかる「仕事頑張り表」を作成し、頑張って仕事をしている人がみんなに認めてもらえるようにした。次に、渡良瀬川の体験学習を受けた道徳の授業を行い、勤労についての意欲化を図る。その後、仕事をやり遂げた充実感や成就感を感じる道徳の授業を行い、学級活動で係・当番を見直し、今後の活動に意欲をもって取り組めるようにする。点字体験の学習後に点字でメニューを作成した女子児童の道徳の授業を行い、働くことの大切

さを再確認し、自分にできることは積極的に働こうとする心情を育て、学級の仕事だけでなく学校全体に関わる仕事にも目を向けさせ、５学年の委員会活動へと繋げていく。

このような実践を行うことで、働くことの大切さを知り、進んで働こうとする気持ちをもつことができると考えて本主題を設定した。

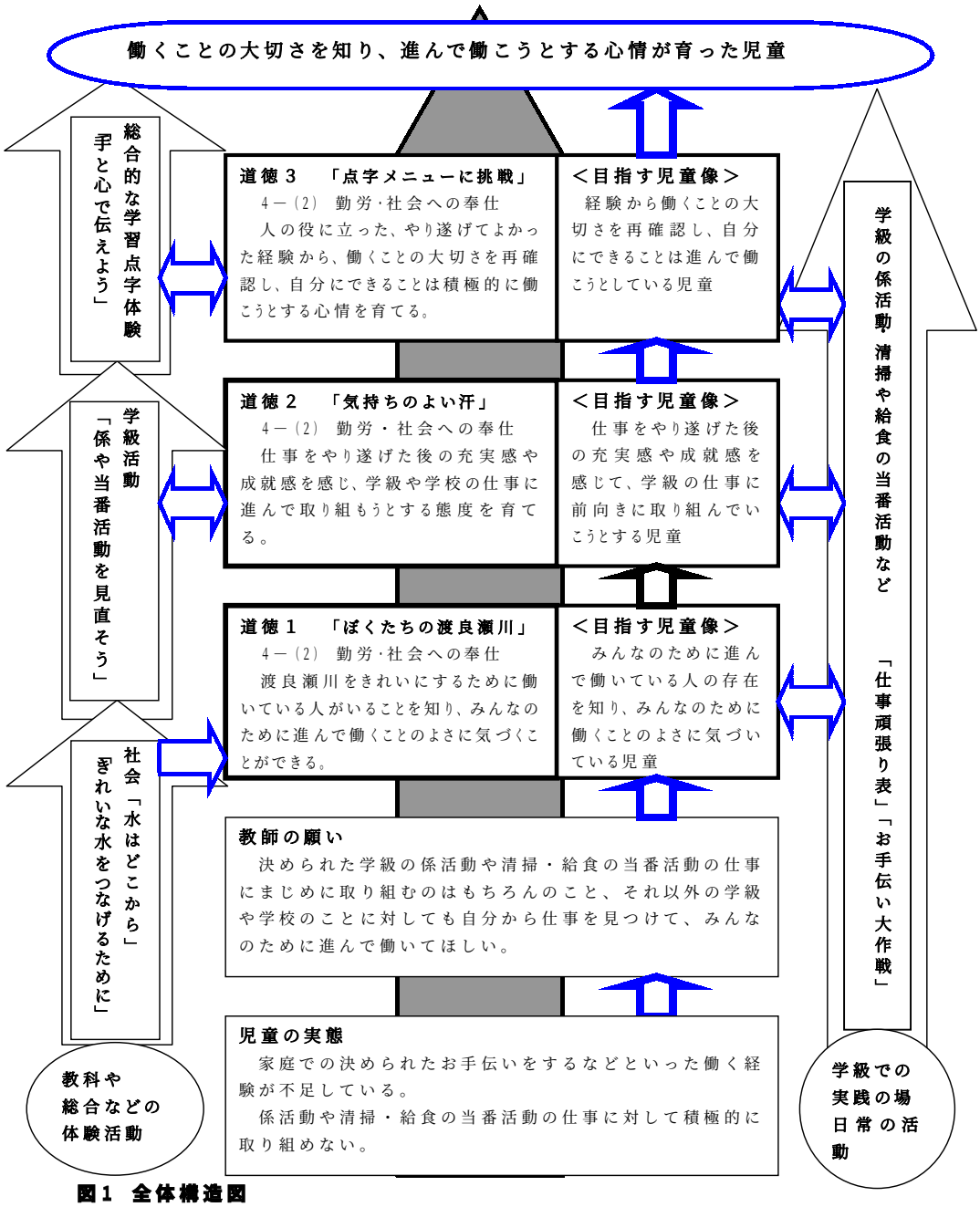


図１　全体構造図

Ⅱ　研究のねらい

道徳「勤労」<勤労・社会への奉仕４－(2)>において、社会科や学級活動、総合的な学習の時間の学習と体験活動との関連を図った道徳１、道徳２、道徳３の学習を通して、働くことの大切さを

知り、進んで働こうとする心情が育つことを実践を通して明らかにする。

Ⅲ 研究の見通し

次の見通し１・２・３の道徳の授業に取り組むことで、働くことの大切さを知り、進んで働こうとする心情を育てることができるであろう。

１　社会科「水はどこから」「きれいな水をつなげるために」の学習した後、道徳１【資料名「僕たちの渡良瀬川」＜４－(2)＞】の学習において、渡良瀬川の環境を守るために働いているゲストティーチャー（以下ＧＴとする）から直接学ぶことによって、社会のために進んで働いている人の存在を知り、みんなのために働くことのよさに気づくことができるであろう。

２　茶臼山の清掃活動を実施した後、道徳２【資料名「気持ちのよい汗」＜４－(2)＞】の学習において、仕事をやり遂げた後の充実感や成就感を感じ、学級や学校の仕事に進んで取り組もうとする心情を育てる。併せて、学級活動「係活動・当番活動を見直そう」を行うことによって、自分たちの学究生活に目を向け、学級の仕事に前向きに取り組もうとすることができるであろう。

３　総合的な学習の時間の「点字体験」の学習に続き、道徳３【資料名「点字メニューに挑戦」＜４－(2)＞】の学習をする。点訳ボランティアで働いているＧＴから直接学ぶことによって、働くことの大切さを再確認し、自分にできることは積極的に働こうとする心情が育つであろう。

Ⅳ　研究の内容

1　基本的な考え方

(1)　目指す児童像

働くことの大切さを知り、進んで働こうとする心情が育った児童とは、次の①～③のような姿であると考えた。

ア　働くことの意義や大切さ、よさを理解している子

社会や集団生活の中で、働くことによって人々の生活が成り立つことや、人々は仕事を分担し合って生きていることを理解するとともに、働くことのよさに気づき、自分のやるべき仕事にまじめに取り組んでいこうとする意欲をもっている。

イ　仕事をやり遂げた成就感や人のために役に立った喜びを実感している子

仕事をやり遂げた経験をもち、成就感を味わい、また次もやってみようと意欲をもっている。自分が、仕事をやり遂げたことによって、友達や学級のためになり役に立つ喜びを実感している。

ウ　みんなのために自分にできることを進んで働こうとする子

学級の係や当番活動は、もちろん、人の役に立つことで自分にできることはないかを考え、進んで働き、みんなのために働いている。

(2)　勤労に関わる体験活動について

ア　社会科で「水はどこから」と「きれいな水をつなげるために」の学習について

桐生市の元宿浄水場は渡良瀬川の水を直接取り入れ、水道水として安心して飲めるように水をきれいにしている。実際に見学に行った際、川からすぐに取り入れた水は汚れていることを見たり、浄水場の人から川を汚さないようにお願いされたりした。次に、渡良瀬川の流れを地図でたどり、同じ川をどんな人たちが使っているかを調べた。また、下水処理の仕組みを知り、川の環境問題に目を向けて、学校の近くの渡良瀬川の様子を観察に行った。さらに川の下流に住む人々のためにも自分たちにできることを考え、清掃活動を行った。この学習で学んだことを道徳１で生かしたい。

イ　学級活動「係や当番活動を見直そう」の活動について

道徳２の学習を受けて、学級の係や当番活動の状況を確認し、みんなのために進んで活動しようとする話合いを行う。学級の子どもたちへのアンケート結果をまとめたり、提示したりすることを学級代表を中心に子どもたちの自主的な活動に任せ、進んで活動できるようにしたい。学校の仕事への取組を充実させるために、係や当番の実施状況が一目でわかる「仕事頑張り表」を作成し、頑張って仕事をしている児童がみんなに認めてもらえるようにする。

ウ　総合的な学習の時間「点字体験」の学習について

「手と心で伝えよう」の学習の中で視覚障害者の生活を学び、点字を読んだり、打ったりする体験学習を行う。桐生市点訳文化会の点訳ボランティアの人たちを講師に招き、実施する。点字を打つ時の手の痛みや大変さを実感する。この学習で学んだことを道徳３で生かしたい。

(3)　地域人材の活用について

働くことの大切さを知り、進んで働く勤労について深く考えるために、自分の考えで地域やみんなのために進んで働いている方をＧＴに迎え、自分がやっていることに誇りをもっていることや、願いなどを語ってもらう。ＧＴは、児童にとって身近に感じる存在の方とするために、体験活動の講師の方や身近な地域に生活している方にお願いする。各授業のＧＴは次の３人である。

道徳１　桐生市の川の環境問題に取り組んでいる方（桐生市の川づくりネットワークの会長）

道徳２　神明小学校の飼育委員会委員長（６年生）　＜映像と手紙での間接的な参加＞

道徳３　点訳ボランティアで活躍している方。（桐生市点訳文化会会員）

ＧＴは、授業のはじめに児童に紹介し、学習の様子を参観してもらい、読み物資料で児童の価値が高まった終末の段階で直接参加してもらい、授業の様子の感想や児童の考えについて賞賛したり、補足したりするように５分程度話をしていただく。授業の事前には、ＧＴと授業のねらいに迫るための話のポイントなどの打ち合わせを数回行い、手落ちのないようにする。事後には、児童が学習の感想や質問したいことをまとめたお礼のお手紙を書く。

2　実践の概要および結果と考察

検証にあたっては、事前調査で児童の勤労意識を把握し、実践研究の中でワークシートや GT へのお礼の手紙などで実践経過に伴う変容を分析する。二人の抽出児を選んで、変容を具体的に確認した。また、調査を行い、事前、事後の意識の比較し、子どもの変容をみとり、数値化してみた。

【Ａ子】　学級では、イベント的なことには積極性を発揮するが、毎日の係や当番活動では、よい時とそうでない時の波がある。事前調査「係・当番活動アンケート」で、「面倒くさいし、早く遊びたい」ので進んで取り組めないことがあると答えている。

【Ｂ男】　学級では男子の中心的存在で影響力が大きい。事前調査「係・当番活動アンケート」で、「遊びたい気持ちに負けてしまう」ので進んで取り組めないことがあると答えている。勤労意識が高まって欲しい児童である。

(1)　みんなのために進んで働いている人の存在を知り、みんなのために働くことのよさに気づくことができたか。

ア　実践の概要

社会科で学校の近くの渡良瀬川の様子を観察に行き、清掃活動を行う。これを受けて、道徳１を行った。改作資料「ぼくたちの渡良瀬川」は、「渡良瀬川の汚れ具合が気になった主人公のぼくが川に行ってみると、自主的に清掃活動しているおじさんに出会う。思わず手伝いをした時に聞いた話に触発された主人公のぼくが渡良瀬川市民清掃に参加する」という話である。市民清掃に参加する主人公の思いを確認した後に、ＧＴから渡良瀬川の環境を守るための取組の様子やそのほか携わ

っているボランティア活動のことを聞き、小学校４年生に望まれることについて話し合った。

イ　結果と考察

児童は、事前に渡良瀬川の観察や清掃の体験活動を行い、また、資料を地域の実態に合わせて改作していたので、「おじさんの話がぼくの心に残ったわけ」や「ぼくが市民清掃に参加したのはどうしてか」の発問に対しては的確な答えが出された。授業の終末でのＧＴの話の中で「桐生市で誰にもほめられなくても自主的にみんなのためになる活動している人を少なくても５０人以上知っています。」というところでは、子どもたちも驚いた表情を見せていた。ＧＴの話は真実味があり、子どもたちの心の中に響いたものと考えられた。資料１は、授業の最後に児童が記述したものを整理したものである。このことから、ほとんどの児童が、みんなの渡良瀬川のために進んで働いている人たちがたくさんいることを理解したと言える。

資料1　児童の感想

○渡良瀬川を大切にしていこうと思った。(9名)【B 男】
○渡良瀬川に行ったら、ごみ拾いをしたいと。(6名)【A 子】
○渡良瀬川を汚してはいけない。きれいにしなければ。(4名)
○すごいな。やっている人は偉いなと思った。(2 名)
○渡良瀬川はみんなに大切にされている川だと思った。(1名)
○渡良瀬川はみんなの生活に必要な川だと思った。(1 名)
○渡良瀬川は歴史のある川だと思った。(1 名)
○渡良瀬川は汚れていたんだと思った。(1 名)
○自分にできることをしていきたいと思った。(1 名)

資料2　Ａ子のお礼の手紙

この前の道徳の授業では、色色な事を教えてくれてありがとうございました。家に帰ってすぐに、K さんが教えてくれたことをお母さんやお父さんと弟に話しました。私からお母さんに「川にごみ拾いに行こうよ。」と言って、ごみ拾いに行ってきました。ごみ拾いをしに行ったら、2、3人の人がごみを拾っていました。ごみは2袋でました。

さらに、自分も渡良瀬川のために何かをしたいと今後の行動への意欲の高まりを示す感想を書いた児童が四分の三近くもいた。資料２は、ＧＴへ宛てたＡ子のお礼の手紙の一部である。Ａ子は家に帰って授業のことを早速家族に話し、自分から家族に働きかけて渡良瀬川のごみ拾いに出かけている。ＧＴとの関わりによって、みんなのために働くことのよさを感じ取り、自ら行動に移している。これらのことから、資料を通してみんなのために働いている人がたくさんいることに気づき、ＧＴの話により、みんなのために働くことのよさを感じ取ったと言える。

(2)　仕事をやり遂げた後の充実感や成就感を感じて、学級の仕事に前向きに取り組もうとすることができたか。

ア　実践の概要

道徳１で、みんなのために働くことのよさを感じ取った後、総合的な学習の時間の「茶臼山を調べよう」で茶臼山登山の下山時にごみ拾いを行った。その後、道徳２を行った。

道徳２では、資料「気持ちの良い汗」で仕事をやり遂げた後の充実感や成就感について考えていった。「夏休みの暑い日に学級園の水やり当番に来たぼくは、草取りまですることになりうんざりしていた。そこへ、一人で仕事をしていた飼育委員の５年生が手伝いを頼みにくる。暑い中の草取りで疲れていた僕は返事できずにいた。しかし、飼育委員の人のことが気になっていた僕は、うさぎ小屋へ駆け出して、手伝い、噴出した汗が気持ちよく感じた」というお話である。その後、神明小学校の飼育委員長の手紙を読み、飼育委員の仕事の大変さや４年生へのお願いを伝えた。

イ　結果と考察

授業の導入と一般化の場面では、事前に行ったアンケート結果を掲示して、考えの手助けとした。始めに草取りをしていたときの汗と飼育委員の手伝いを終えた時の汗を比較して、気持ちの良い汗はどういうときに流れるかを考えさせた。そのため、「噴出した汗が気持ちよく感じられたのはどうしてか」という問いに「自分から進んでやっていたから」「がんばってやっていたから」「困っている人を助けたから」というように「達成感や成就感を感じた汗」という答えが多く出された。

授業の終末の飼育委員長からの手紙（資料３）は、児童にとって身近な存在の６年生のものだったために、教師の予想以上に子どもたちの心に響いていたものと考えられる。資料４は、授業の最後に児童が記述したものを整理したものである。

資料3　飼育委員長からの手紙

＜飼育の仕事＞
毎日やっている仕事は、うさぎの世話と飼育小屋の掃除です。飼育小屋のえさ入れに粉のえさや野菜を入れます。後、水を入れかえます。ほうきで飼育小屋の中のうさぎの糞を取ります。これはいつも昼休みにやります。仕事が終わったら、日誌に今日の出来事やうさぎの様子、自分の感想などを書いて、飼育委員会の先生に出します。夏休みや冬休みも当番を決めてやります。冬休み、雨が降っていた寒い日に当番に行きました。手がかじかんですごく大変でしたが、うさぎが元気にえさを食べるのを見て、仕事をやってよかったと思いました。4年生は、来年は委員会に入ります。神明小学校のみんなのために進んで働いてほしいです。よかったら、飼育委員会に入ってください。

資料4　児童の感想

○自分から進んで、できることはがんばりたい。気持ちの良い汗をかいてみたい。(16名)
○自分から進んで仕事をやり遂げるといい気持ちになるんだと思った。(7名)
○飼育委員の人や主人公のぼくは、がんばっていて偉いと思った。(3名)
○主人公のぼくは、最初のころ面倒くさそうだったけど、後の方は気持ちよさそうだった。(1名)

このことから、ほとんどの児童が仕事をやり遂げた後の充実感や成就感のよさを感じて、自分にできる仕事に前向きに取り組もうとする意欲がもてたと言える。資料５「Ａ子とＢ男の授業後の感想」には、達成感や成就感についての記述があった。

資料5　A 子と B 男の授業後の感想

・掃除当番の仕事をやり遂げると、掃除した場所がきれいになるから気持ちいい。自分から進んで係のこととかをすると、先生に「偉いね。」とか言われてうれしくなる。【A 子】
・飼育委員長の話を聞いて、大変だけど仕事をやりとげた後はすごく自分のためになるからいいことだなと思った。【B 男】

その後、学級活動「係活動・当番活動を見直そう」の授業において、係活動では、以前は仕事がないからできないという理由から積極的に活動できなかった反省を踏まえ、仕事を見つけよう、探そうという意識が芽生え、活動の見直しを行うことができた。当番活動では、曜日別に掃除分担の係を決めたり、進んで掃除に取り組める工夫や約束などを話し合ったりして、各掃除分担個所に掃除改善カードを貼り出して、毎日の掃除を行っている。これらのことから、「気持ちの良い汗」と「係活動・当番活動を見直そう」の学習を通して、仕事をやり遂げた後の充実感や成就感のよさを感じ取り、学級の仕事に前向きに取り組もうとすることができたと言える。

(3)　働くことの大切さを再確認し、自分にできることは積極的に働こうとする気持ちをもつことができたか。

ア　実践の概要

総合的な学習の時間の「点字体験」で点字の打ち方を学んだ後に、道徳３を行った。資料「点字メニューに挑戦」で働くことの大切さや人の役に立つことの喜びについて考えた。資料は「自分の家の食堂に来た目の不自由な客にメニューを読む経験をしたのり子は、店の点字メニュー作りを思いつく。点訳の仕事をしている人の助けをかりながら、一人で作った。思うようにいかないことも多かったが、のり子は５日後に無事点字メニューを完成させる」という話である。苦労の末、完成させた点字メニューをそうっとなでたのり子の気持ちを確認した後に、ＧＴからボランティアを始めるきっかけや活動を続けている理由などの話を聞き、小学校４年生に望まれることを話し合った。

イ　結果と考察

児童は、事前に点字を打つ体験をしていたので、資料の内容をすんなりと理解することができた。

「完成させた点字メニューをそうっとなでたのり子はどんなことを考えていたか」という問いには、多くの児童が「頑張って点字メニューを完成させてよかった。目の不自由な人の役に立ってよかった」と答えていた。働くことは、人の役に立つということの認識ができた。授業の終末でのＧＴからの「やめようと思ったことも何度もあったけれど、長い間続けてこられたのは、人の役に立っているという実感がある。そして、このことが自分のためにもなり、自分の財産になっている」という話を聞くことで、子どもたちに自分にできる人の役に立つ何かを考えようとする気持ちをもった。

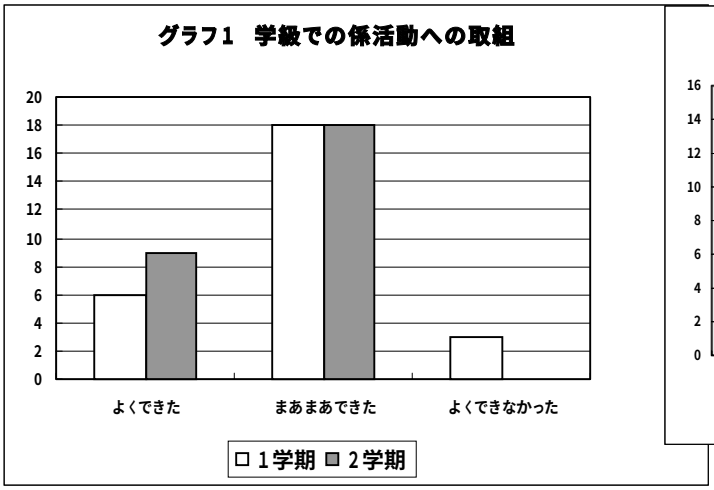
資料6　児童の感想

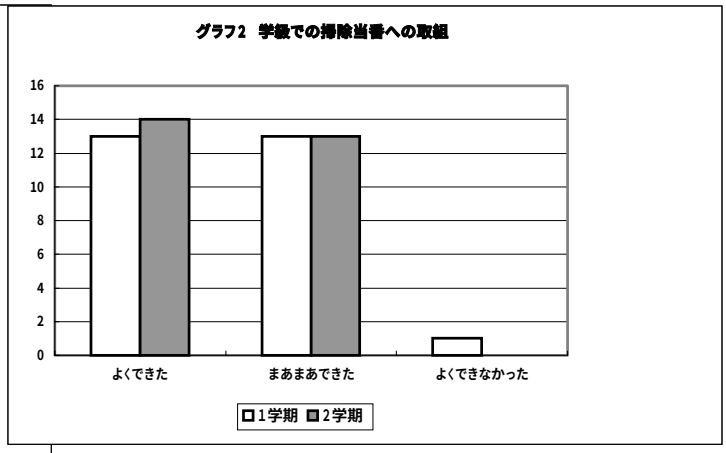
○目の不自由な人の役に立つことをしていきたい。助けてあげたい。(10 名)【A 子】
○点訳文化会の人たちは目の不自由な人の役に立っていて偉いな。のり子は点字メニューを作って目の不自由な人の役に立って凄いな。(7名)
○人の役に立つようなことを自分から進んで見つけていきたい。やっていきたい。(4名)
○**T** さんと **F** さんからいろいろなことを教わってよかった。点字のことやボランティアのことがよく分かってよかった。(3名)
○のり子や点訳文化会の人たちを見習って、点字を覚えたいな。がんばりたいな。(2名)【B 男】
○何事もあきらめないでやっていきたい。(1名)

資料7　児童のお礼の手紙

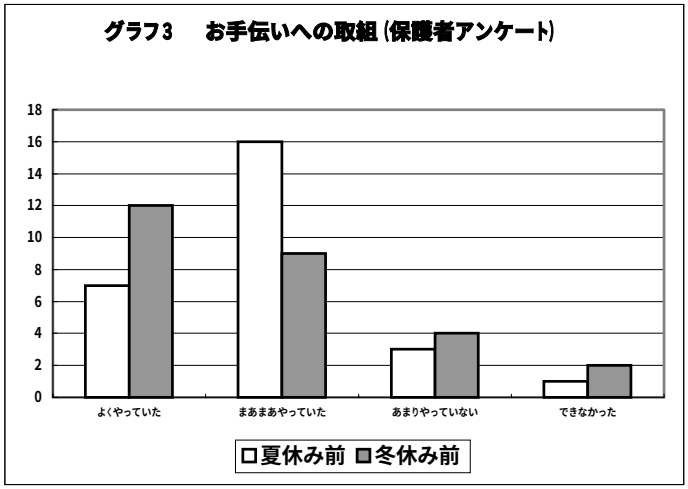
○点訳文化会の人たちは目の不自由な人の役に立っていて、立派だなと思いました。私に新しい夢ができました。それは、目の不自由な人の生活を自分でできるだけ支えることです。そのために、今、私がやっていることは、最後までやり通すことです。掃除や係などを頑張っていきたいです。
○T さんは目の見えない人のために活動しているなんてすごいなあと思った。やってみたら難しかった点字を続けていてすごいなあと思った。【B 男】
○道徳の授業に、お忙しい中、来てくださってありがとうございました。T さん、F さん、これからもボランティア活動をがんばってください。学校でいろいろなことをがんばっていきたいと思います。【A 子】

資料６では、多くの児童が人の役に立つことをしていきたいという思いを感想に書いた。資料７では、ＧＴの話から学んだことを、自分のこれからの生活に生かしていきたいという意識の表れた記述が多く見られた。これらのことから、「点字メニューに挑戦」で、働くことの大切さを再確認し、ＧＴの話から、自分にできることは積極的に働こうとする気持ちをもつことができたと言える。





学級での振り返りアンケートを１学期末と２学期末に実施し、子どもたちの学級での係や清掃当番への取組について自己評価を行った。（Ａ子は、グラフ１では１・２学期とも「まあまあできた」、グラフ２では１学期「まあまあできた」から「よくできた」と答えている。Ｂ男は、グラフ１では１学期「よくできなかった」から「まあまあできた」に、グラフ２では１・２学期とも「まあまあできた」と答えている。）１学期と比べて、Ａ子は清掃当番、Ｂ男は係活動で取組方がよくなっている。これらをまとめて、本研究による子どもたちの変容の様子をグラフ化してみた。グラフ１とグラフ２での変化は僅かではあるが、日々の学級での係や当番の活動の様子を観察していると、仕事を探したり、自分から進んで行ったりする場面も多く見られるようになっており、子どもたちの働く意識は上がってきていると言える。



夏休みと冬休み前に「お手伝い大作戦」の計画を立てるために、児童の家庭でのお手伝いの取組状況について、保護者にアンケートを実施した。（グラフ３）本研究後に「あまりやっていない」「できなかった」の人数が増える結果となった。家庭が子どもたちにとって学級ほど働く場所になっていない現状がみられる。しかし、アンケートに記述された保護者の言葉（資料８）を見るとＡ子とＢ男も含めて、１学期に比べて、お手伝いへの取組はよくなってきていると言える。

資料8　1学期と比べて子どもたちのお手伝いについて気づいたこと（保護者より）

○手伝いを始めると最後まできちんとやってくれた。【A 子の母】（よくやっていた）
○安心して任せられるようになってきた。【B 男の母】（まあまあやっていた）
○言われなくても自分から気づいてすることが１学期に比べて多くなった。（よくやっていた）
○いやがらずにお手伝いをしてくれるので助かることが多かった。（まあまあやっていた）
○毎日自分から進んでお手伝いをやってくれた。（よくやっていた）
○自分の身の回りのことがよく気がつくようになってきた。（よくやっていた）

Ⅴ　研究のまとめと今後の課題

1　研究のまとめ

○道徳１や道徳３では、事前に体験した渡良瀬川のゴミ拾いや点字を打つ学習に関連した内容の授業を行い、それにふさわしいＧＴを活用した。事前の体験活動での認識や価値観が道徳の授業に生かされ、価値を話し合うのに有効であった。また、ＧＴから直接学ぶことで、みんなのために働くことのよさや人のために役立つ喜びを、より具体的に子どもの内面に響かせることができた。子どもの中に、自分にできることを見つけて、進んで働いていきたいという意識が高まった。

○道徳２で、仕事をやり遂げた後の充実感や成就感のよさを感じ取ることができたことにより、「係活動・当番活動を見直そう」の学習で、意欲的に改善に向けての話合いがなされ、その後、学級の仕事に前向きに取り組む姿が見られるようになった。

○みんなのために進んで働くことのよさに気づく学習から、仕事をやり遂げた後の充実感や成就感を感じる学習、自分にできることは積極的に働こうとする学習と、段階を踏まえて研究を進めてきたことは、進んで働こうとする心情を育てる学習過程として有効であり、体験活動と道徳の授業を上手く関連させることにより、より充実した相乗効果を生むことも分かった。

2　今後の課題

進んで働くという心情は、児童の日常生活の中で維持し続けるのが難しいものである。道徳の授業で高まった心情を、子どもの毎日の生活の様々な場面で自然に実践していけるようにしていかなければならない。そのために、より子どもの実態に寄り添った体験活動と道徳の授業との適切な組み合わせを考え、実践力に繋げていくことが必要である。